

明日

みずの まき
水野 真希

「明日なにして遊ぶ？」

この言葉に違和感をいだく人はいないと思う。私たちは、いつも「明日」や「来週」など、未来の話をする。今では当たり前のことであるが、七十七年前は当たり前ではなかった。

私の曾祖母は被爆者だった。十歳の夏休みに学校で配布された休み中の予定表にたくさんの予定を書いて、それを曾祖母に見せて言った。

「明日は家族でプールに行くし、来週は友達と水鉄砲して遊ぶんよ。」

すると、曾祖母は微笑んでこう言った。

「いっぱい楽しそうな予定があるんじゃないかね。いい時代になったもんじゃわ。」

当時の私にはわからなかったが、今の私ならこの言葉に込められた曾祖母の思いが少しはわかる気がする。

戦時中の日本では、毎日が命の危機と隣り合わせだったと聞

く。今はみんなが当たり前前に手に入れられる安全や安心、そして未来が、当たり前前のもではなかったのである。そんな生活の中、家族や自分を勇気づける時に使用されるのが「明日」という言葉だったそう。曾祖母は、あまり戦争や原爆被害のことを話さなかった。しかし、当時のことを思い返すと、「明日」という言葉を使用し、未来の話をする私を見て平和を感じると同時に、曾祖母なりに、日々の会話から安全や安心、未来が当たり前前ではないということを伝えたかったのだろう。

「明日なにして遊ぶ？」という言葉に違和感をいだくことなく生活できていること、安全安心な生活や未来が当たり前前に手に入ることは平和である。しかし、私たちはその平和が尊く貴重なものであるとは気づかない。戦争を経験していない私たちが平和のためにできることは、被爆者の方のお話を伝え続けることはもちろん、今過ごしている日常や、これから過ごす未来が尊く貴重なものであることに目覚めることだと思ふ。